「人間であることが恥ずかしい」　　2025 年 10 月 06 日

イスラエルのガザのパレスチナ人へのジェノサイドをテレビで、連日観ている。立ち上る爆弾の炎と煙に逃げ惑う住民、食を求めて鍋を我勝ちに差し出す住民に発砲する。栄養失調で動けなくなり、骨と皮になって餓死する。これらの犠牲者たちを抱きしめ呻く。生き地獄の様相は観るに耐えない。この蛮行を報道させまいとジャーナリストたちを狙い撃ちしている。世界は、このジェノサイドを止められないのかと無力感の中で、胸が痛む。

ドイツナチズムがユダヤ人ホロコーストのために造ったアウシュビッツから生還したV・E・フランクルは必読の名著と言われる『夜と霧』を著し、強制収容所での地獄の事態を報告した。その後『それでも人生にイエスと言う』を著し、自分が人生の意味を問うのでなく、自分が人生から問われていることに応答するというコペルニクス的転回をする時、人生を肯定できると説き、多くの人に生きる勇気を与えてきた。

同じく、強制収容所を生き抜いたP・レーヴィも、戦後、収容所での体験を著し、また講演活動をしてきた。彼の講演を聞いたドイツ人が、「ドイツ人であることが恥ずかしい」と応じた時、彼は「私は人間であることが恥ずかしい」と答えたと言う。彼は、1987 年に自宅で自死した。自死の原因は明確に捉えられていない。強制収容所から解放された人たちに、戦後、自死者が多く出た。生き延びたいと思った人たちは、死に逝く人のパンを奪い、知恵を尽くして体力を温存させ、命じられるままに同胞の死体をガス室に運んだ。それらを批判され、苦しみ、自死に追い込まれたケースもあったと聞く。P・レーヴィの場合、あれだけのジェノサイドを体験したイスラエル人が、1948 年、イスラエル国家の再建後、75 万人のパレスチナ人を難民化させたナクバ（惨事）を敢行し、続いて、ガザとヨルダン川西岸のパレスチナ人を迫害、虐殺するジェノサイド的対処を繰り返している同胞の現実に絶望したのではないかと、私は想像している。確かに「人間であることが恥ずかしい」と思うほど、人間の罪は測り知れない深いものである。

イスラエルのガザへのジェノサイドは戦争犯罪に他ならない。この犯罪に対し、西欧諸国は「反ユダヤ主義」と非難されないように言葉を慎んできた。「反ユダヤ主義」とはユダヤ人、ユダヤ教に対して偏見を持って憎悪し、宗教的・経済的・人種的理由からユダヤ人を差別・排斥しようとする思想である。この思想から、ユダヤ人を差別、抑圧してきた事実を忘却することも人倫に反すると受け取られた。そこには、深い贖罪意識を持つべきであるという心理が働いている。殊にドイツ人は、ユダヤ人ホロコーストは拭い去れない罪責として認めざるを得なかった。西欧諸国はイスラエルのガザ攻撃に声高に反対できなかった。ところが、ようやく「反ユダヤ主義」とネタニヤフ政権批判とは違うことに気づき、イギリス、フランス、カナダなどは、贖罪意識でイスラエル批判を封じることは正義に反するとの認識を表明した。ドイツも、これだけのジェノサイドを見れば、パレスチナ人が味わっている惨劇を無視できなくなるだろう。パレスチナ国家承認国は、国連加盟国の 80%を超え、150 ヶ国以上になった。石破首相は国連で「国家承認をするか否かではなく、いつ承認するかが問題だ」などと、的外れの演説をしている。「今でしょう」という時なのに、米国に忖度して、見送っている。米国はユダヤ系の経済・文化の影響が大きく、キリスト教シオニズムに立つ福音主義教会の票を得たいと、ネタニヤフ政権を頑固に支援し続けているが、異常に見える。イスラエルのジェノサイドとこれを止められない現実を見て、P・レーヴィの「人間であることが恥ずかしい」という思いに駆られる。人を無慈悲に殺害してはならないという、当たり前の「人間である」世界に立ち帰ることを切に望む。